

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

The Japan Branch of the Dickens Fellowship

2019年度秋季総会 プログラム

Annual General Meeting 2019 Programme

日時：2019 年 10月 5日（土） Date: 5 October 2019

会場：立命館大学 大阪いばらきキャンパスA棟 AN211教室（〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町2-150）

Venue: Room AN 211, A Building, Osaka Ibaraki Campus, 2-150 Iwakura-cho, Ibaraki, Osaka 567-8570

理事会 Board of Trustees Meeting (13:15 – 13:35) AN221教室

総 会 General Meeting (13:40 – 14:10)

開会の辞・議事： 新野 緑（ディケンズ・フェロウシップ日本支部長）

Midori Niino (President, The Japan Branch of the Dickens Fellowship)

第 1 部 研究発表 Short Paper Session (14:15 – 14:55)

司会： 鵜飼信光（九州大学）Nobumitsu UKAI (Kyushu University)

発表： 熊谷めぐみ（立教大学大学院）Megumi KUMAGAI (Rikkyo University)

「*Great Expectations* における時の流れ」 “The Flow of Time in *Great Expectations*”

第 2 部 シンポジウム「ディケンズとポー」

Symposium: “Dickens and Poe” (15:15 – 17:45)

司会・講師： 松本靖彦（東京理科大学）Yasuhiko MATSUMOTO (Tokyo University of Science)

講師： 西山けい子（関西学院大学）Keiko NISHIYAMA (Kwansei Gakuin University)

橋野朋子（関西外国語大学）Tomoko HASHINO (Kansai Gaidai University)

渡部智也（福岡大学）Tomoya WATANABE (Fukuoka University)

懇親会 Convivial Party (18:00 – 20:30)

会場：立命館大学 大阪いばらきキャンパス B 棟

Garden Terrace Lion 立命館いばらきフューチャープラザ店 (050-3464-2018)

会費：一般6,000円 学生4,000円

第1部 研究発表 Short Paper Session

「*Great Expectations* における時の流れ」 “The Flow of Time in *Great Expectations*”

熊谷めぐみ

Great Expectations においてディケンズはさまざまな時間の流れを描き出している。それは大人になった主人公ピップが過去を語るという物語の形式だけでなく、残酷な過去の記憶を刻み続けるかのように時を止めようとするミス・ハヴィンシャムや、現実から逃れるために過去を美化し、昔に戻ろうと鍛冶屋へ向かうピップの行動などに端的に表れている。そのようなねじれ、停滞する時間感覚をディケンズが作品においてどのように描き出しているかを検討しながら、*Great Expectations* を時の流れの回復の物語として、そしてそこからこぼれ落ちる要素を内包した物語として、作品の考察を試みたい。

第2部 シンポジウム Symposium

「ディケンズとポー」 “Dickens and Poe”

ディケンズは1842年の第一次訪米時にフィラデルフィアでポーに会っている。このふたりの人物が相まみえたのは歴史上その時一度きりだが、両作家の間には文学テキストを介した濃くて深い関係がある。最もよく知られているのは *Barnaby Rudge* を介しての因縁であろう。探偵小説仕込みの同作品を連載中のディケンズは、ポーの書評に自分の手の内を見透かされて驚いたという。また、ポーの ‘The Raven’ は、この作品（カラスの Grip が出てくる）から着想を得ているという指摘もある。

この作品の例に限らず、ポーは実によくディケンズ作品を咀嚼し、多くを吸収していたと思われる。一方、ディケンズの方はどうだろうか。ポー（的文学観）に刺激を受けた点はなかっただろうか。また、相互影響を別にしても、探偵物や幽霊（死者）など両者の文学には共通した関心がみられる。

このシンポジウムでは、ポー経由でディケンズを読み、またディケンズに照らし合わせてポーを読んだとき、それぞれのどんな凄さや魅力、優れた技量が際立ってくるのか、4名の講師による4つのアプローチで探ってみたい。いくらかでも新しい発見をしたいと考えている。

登壇者と発表内容は以下の通り（登壇者名 50音順）。

「非人間的笑い と 超人間的笑い —ポーとディケンズにおける恐怖とユーモア— “Anti-Humanist Laughter and Super-Humanist Laughter: Terror and Humor in Poe and Dickens”

西山けい子

ポーは『フォリオ・クラブの物語』として構想された最初期の短編から、死の数か月前の「Xだらけの社説」(“X-ing a Paragrab”)まで、諷刺、パロディ、ほら話、バーレスクの類に属する作品を書き続けた。ポーにおいて、滑稽な味をもつ物語群において繰り返し出現する主題（生きながらの埋葬、死者の蘇り、えぐられる目、切断される首、分身、狂気など）は、恐怖の物語においてしばしば扱われる主題と共通している。一方、ディケンズにおいても、『ピクウィック・ペーパーズ』のようなユーモアが基調になった作品に、無気味な物語やグロテスクな語りが織り込まれていたり、ゴシックの雰囲気の中に滑稽に転化する要素が含まれていたりする。無気味と滑稽はどのようなところで接点を持ち、どのようなところで分岐するのか。なぜ同じものをめぐって、一方で恐怖が、一方で笑いが導かれるのか。ポーとディケンズのいくつかの作品をめぐって、恐怖や無気味が笑いやユーモアとどのような関係にあるのかを探求する。また、そこから照らし出される両者の共通点と相違点にも着目する。

「ディケンズと幽霊物語—合理的説明を求めて」
“Dickens and Ghost Stories: His Quest for Rational Explanations”

橋野朋子

ディケンズは『クリスマス・キャロル』をはじめとするクリスマスブックや *HW* や *AYR* で刊行し続けたクリスマス号などを通して、クリスマスの晩には暖炉を囲んで幽霊話を語るといった時代のイメージを築き上げていったと言われる。しかし、読者が喜ぶような幽霊物語を提供する一方で、ディケンズの霊的なものへの立場は一貫して懐疑的なものであった。とりわけ当時流行のラップ現象や交霊会に対しては極めて批判的で、*HW* や *AYR* には、それらの信ぴょう性を揶揄したり、心靈現象を科学的に説明したりする様々な記事を掲載している。本発表ではそれらを基軸として、ディケンズの初期の幽霊物語から晩年の『信号手』(1866)にかけて、霊的なものの解明を試みるディケンズの態度を考察していく。また、同じ視点からポーの『ライジーア』(1838) および『アッシャー家の崩壊』(1839) も見ていきたい。

「夜歩くディケンズとポー」 “Dickens the Nightwalker and Edgar Allan Poe”

松本靖彦

ディケンズの想像力を生涯にわたって刺激してやまなかったロンドンは、まさしく「マジック・ランタン」だった。しかし、「嫌悪の魅惑 (the attraction of repulsion)」と表現されるほどの妖しくも抗いがたい強さで彼を惹きつけたのは、とりわけ彼が夜歩きをしていて出くわしたロンドンの夜の情景ではなかっただろうか。夜のロンドンを舞台にした ‘The Man of the Crowd’ の情景描写については、ポーが随所でディケンズを参照した可能性が指摘されている。少年時代の一時期をロンドンで過ごしたポーではあるが、この作品の場合、ディケンズの眼を介して夜のロンドンを徘徊していると言えそうである。本発表では、ロンドンの夜歩きを描いたポーの ‘The Man of the Crowd’ とディケンズの *Night Walks* を軸に、両者が夜のロンドンの情景をどのように構築しているか比較し、それぞれの創作方法の特質を浮かび上がらせたい。

「謎解きは書評のあとで」 “Why Did Poe Stick to His Own Theory?”

渡部智也

ディケンズとポーと聞いて、多くのディケンズ研究家が真っ先に思い浮かべるのは『バーナビー・ラッジ』を巡る「謎解き」だろう。ポーは同小説の全体の3分の1程度を読んだところで、物語冒頭に描かれている殺人のトリック（真犯人は庭師ではなく殺されたと思われている執事のラッジであり、本作では替え玉殺人のトリックが利用されている）を看破し、作品がまだ連載中であるにもかかわらず、『サタデー・イブニングポスト』紙に掲載した書評の中で自らの推理を公表した。しかし、この「ポーがディケンズのトリックを見抜いた」という点については広く知られている一方で、彼が同じ書評の中で「外した推理」についてはこれまでまず注目されることがなかった。本発表では、ポーが推理を外した部分、特に「ラッジは殺害犯ではあるが、その背後で糸を引く新の黒幕は被害者の弟ジェフリー・ヘアディルである」という、今から考えるととんでもない推理を取り上げ、ポーとディケンズの魅力を「謎解き」という観点から紐解きたい。

アクセスマップ

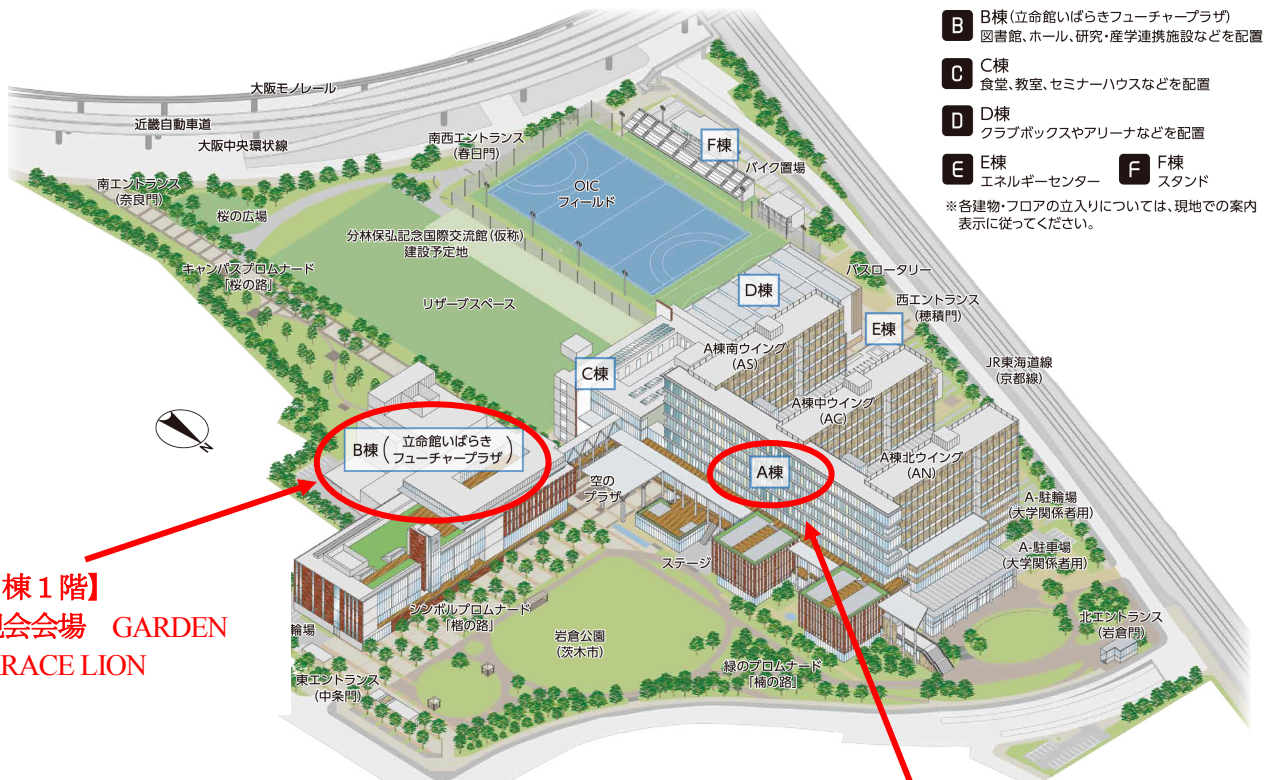


【住所】〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町 2-150 キャンパスインフォメーション Tel: 072-665-2020
2-150 Iwakura-cho, Ibaraki, Osaka 567-8570

【交通アクセス】



キャンパスマップ



【B棟1階】
懇親会会場 GARDEN
TERRACE LION

